



## News Letter

## 巻頭対談 ～山梨県臨床心理士会のこれから～



山梨県臨床心理士会会長

設楽 友崇

日本臨床心理士会 山梨県代議員

吉川 眞理

**編集** 「山梨県臨床心理士会（以下、「当会」）として、ニュースレターを発行する時期になりました。私達心理臨床家にとって、今年元日に発生した能登半島地震は非常に大きな出来事で、それは今も現在進行形の課題であり続けています。職能集団としての当会は、常に時代のニーズに応えられる存在であることに意義があると、こうした出来事がある度に思えてなりません。また、山梨の臨床心理士にとって直接間接にご縁のあった馬場禮子先生が、先般ご逝去されました。私達は先生の御遺志を継ぎ、“より良い”心理臨床を目指す義務があると、去る2月23日の『偲ぶ会』に出席して思いました。お二人にとって、これからの当会の在り方はどのようなものとなるのでしょうか？」

**設楽** 実は当会の発足は1993年9月ですので昨秋に30周年を迎えました。而立という言葉もあります。人間のライフサイクルで言えば青年期が終わり成人期に移る頃で、節目、変わり目の時期ですよね。そのタイミングで馬場先生が逝去され、いよいよ世代が私たちの方へ降りてきたのを実感しました。馬場先生は人間に対する深い関心と畏れを持ちつつ専門家として絶えず研鑽されていた方だと思うのですが、先生の魅力と迫りに間近で接してきた体験や、先生からの教えは、今後も私たち会員の日々の臨床活動を支えていくと思います。

**吉川** 馬場禮子先生の柔和な笑顔を中心に多くの心理臨床学徒が集った『偲ぶ会』でした。心理臨床学会、そして臨床心理士資格認定協会を立ち上げ、臨床心理士の創成に携わった十人衆の中のお一人でした。これらの団体の活動をする際にご一緒させていただくことの多いご縁でしたが、山梨の地で馬場先生の身近で過ごした皆さんとのご縁が広がり、とても心強く思っています。馬場先生は直接山梨県臨床心理士会に直接関わっていただくことはありませんでしたが、メンバーの精神的支柱として存在してくださっていると感じています。

**設楽** ところで、能登半島地震では自然の力をまた突きつけられました。東日本震災の時も思いましたが、私たちは大きな地球の表面で本当にささやかに生きている存在なんだということを今回もまた感じました。同時に、当会を含めて隣県の臨床心理士会同士が助け合って心理支援にあたっている姿に接して、一人で

きないことを協力していくのが人間なんだとも思いました。また、傍に人がいることがどれだけ人を励まし勇気づけるのかということも改めて感じています。これらのことは、私たちの仕事の最も基礎的なことではないでしょうか。

**吉川** 能登半島地震の支援の情報の窓口として、いろいろな情報を私たちに伝えてくださる被害者支援委員会に活動に感謝しています。山梨県からなかなか支援に参加することができないのですが、現地で活動するスクールカウンセラーの状況を伝えていただいています。能登の場合、支援に入れるスクールカウンセラーの人数は限られており、それだけに現地に行かれたカウンセラーの苦労と報告を共有する機会があれば、と考えております。一人の支援者の背景にその体験を共有する仲間が存在することで、支援者が支えられることがあると感じています。可能であれば、オンラインでもよいので支援に参加したカウンセラーの報告を共有できる機会を今後も設けていただければありがたいです。

**設楽** これからの当会の在り方ですが、改めて臨床心理士の役割は何だろうか考えると、会員や臨床心理士仲間に対しては、この仕事はいいよ、一緒に長くやっていきましょうよ、と呼びかけていくことなのではないかと思います。研修の機会を設けたり、雇用について社会に働きかけたりしていくことが必要なのはそのためです。一方で、市民のみなさんに対しては、私たちをぜひご活用ください、きっとお役に立ちますよ、と伝えていくことも大切な役割でしょう。会員一人ひとりの日々の仕事はそのことを実感していただく機会になりますし、市民向けの企画や他業種との交流もその一つとなります。いずれにしても、自分たちが山梨から心理臨床を作るのだという気概に基づく日々の実践が問われていると思います。

**吉川** 設楽会長の心のこもった呼びかけ、いいですね。一人一人の心理臨床の経験が核であり、その核をつなぐネットワークとしての山梨県臨床心理士会の存在が浮かび上がってきました。正直、心理臨床は、地味で厳しい業務ですが、仲間がいること、お互いにつながりあえることで、喜びを感じることができるのだと思います。資格を取得しても、一人で活動していると何か大切なものを見失ってしまうのではないのでしょうか？地域において、点が、線になり、線が面を、面がやがて「器」を形成します。その器の存在が、心いきいきと暮らすコミュニティを醸成していくことを夢見ています。一人ではないよ、仲間になってやっていこうという思いを共有できる、心かよう職能団体として、山梨県臨床心理士会がしっかり地域に根を張って、存続していくことを願っています。

# 学校教育をサポートできる臨床心理士を目指して

学校臨床心理士委員会委員長 田中 健史朗

学校臨床心理士委員会は、学校現場で活動するスクールカウンセラーが多く所属する委員会です。学校現場は、不登校児童生徒数が過去最多を更新し続ける状況であり、いじめの認知件数、重大事案の増加が話題となっております。それに対応すべく、文部科学省より COCOLO プランが出されたり、生徒指導提要在改定されたりしており、日々アップデートされ続ける方針のなかでスクールカウンセリング活動を行っております。そのため、最新の動向を理解するだけでなく、学校現場の現状に対してこれまでの心理臨床学の知見をどのように活用できるのかについて考え、専門性をアップデートするために研鑽を積む必要があります。当委員会では、山梨県教育委員会と連携しながら、年10回の研修会を企画し、スクールカウンセラーの資質向上の機会を提供しております。今年度は、フリースクールの現状を理解したり、養護教諭の先生との連携の在り方について討議したり、学校緊急事態時の支援について事例検討を行ったりしました。

9月の研修会では、登校支援型フリースクール『にじ Labo』代表の田巻典子先生に講師をお願いし、フリースクールの現状と学校との連携についてご講義いただきました（写真参照）。不登校となった児童生徒が、にじ Labo では生き生きと自律的に活動する姿が報告されたり、「変わる学校環境と変わらない学校制度」と不登校の関連についての解説、スクールカウンセラーに求める役割等のお話をいただき、不登校支援の課題と今後求められるスクールカウンセリング活動について考える機会となりました。

学校臨床心理士委員会では、今後もスクールカウンセラーの資質向上のために、様々な活動を行って参ります。



## 社会人としての心理臨床家とは

産業領域委員会 橋本 和仁

心理職が働く領域の中で、産業領域というと、そこで働く臨床家はまだ少ないのが現状です。しかし、産業領域をより広げると、医療、学校など、全ての分野で働く人々が対象であり、その意味では、心理に関わる臨床家のほとんどが、産業分野で働いていると言えるかと思えます。

従来、心理臨床は、クライアントとの二者関係の中で、個別的な心の在り様にきめ細かい対応をしていくものですが、私たちの多くは、社会的な組織や機構に深く関わっているため、職場の人間関係などを常に意識することが重要になります。つまり心理職として仕事をする前提として、社会人としての機能をしっかりとこなすことが求められています。産業領域の委員からも、こうした意見が挙がり、2023年11月26日に「職場における心理士の動き方（うごきかた）を学ぼう～専門性を生かした立ち位置や、役割とは～」というタイトルで研修会を開催することになりました。

講師には、日本臨床心理士会の委員であり、株式会社島津製作所にて、健康経営を推進されている春藤行敏先生をお招き致しました。第一部では、「どこの組織でも、心理職である前に、社会人としての姿勢が求められる」という大前提のもと、名刺交換や、電話やメールのルールなど基本的マナーを学びました。また所属する組織特有の文化や所作を知る必要があることが話されました。第二部では、「面接の中で、心理的支援を行うだけでなく、制度設計、教育研修を行うことで、ポピュレーションアプローチにつなげていく。」ことの重要性が話されました。これは、集団全体を対象として働きかけ、全体のリスクを下げる取り組みを指します。また、個人の不調は、組織や企業の課題や環境から大きな影響を受けているため、企業全体を分析する視点が大切になることを学びました。最後に、「組織に関与しながらも、一定の距離を置き、目に見えるもの目に見えないものも含め、今何が起きているだろうと眺め・考え続ける姿勢に心理職らしさがある。」と話されたことが印象に残りました。

今回の研修を通じて、私たちは、所属する組織の歴史や文化を尊重した上で、臨床家としての専門性とアイデンティティーを保ちながら、私たちにできる実践を行っていくことが大切であると改めて思いました。

今後も産業領域委員会は、情報交換や、事例検討会、他領域との連携を行いながら、幅広い活動を行っていきたいと考えています。

## 2023年度山梨県臨床心理士会主催冬のワークショップ 「メンタライゼーションの理論的基礎（講師 西村馨先生）」に参加して

県立学校教員（臨床心理士） 佐野 和規

臨床心理士の資格を持つ教師として、高校での教育相談に従事していた私は、これまでのカウンセリングの理論に物足りなさを感じていた。生徒の相談に対して、相づちをしたり繰り返しを行ったりしながら、受容共感的に傾聴する。それだけでは、生徒の問題に迫り切れていない感じがした。そんな時出会ったのが、「メンタライジング」という概念であった。

当時、この言葉の意味を調べようとして、ネットで「メンタライジング」というワードで検索しても、まともにヒットしない。唯一、上地雄一郎（2015）先生の「メンタライジング・アプローチ入門」という本が検索にひっかかるだけであった。それは、翻訳書以外で日本の研究者が書いた初めてのメンタライジングの著作である。すぐに購入して読んでみた。すると、その本から目が離せなくなり、むさぼるように一挙に読んだ。自分が求めているものがここに書いてあると思った。

その時の私のメンタライジングの理解は、「自他の心を話題にしたり考えたりすること」、それに尽きる。そして、その営みが相手に愛情として通じるし、それを行うことで、生徒やクライアントにメンタライジング能力が付き、心の問題が改善する、というものであった。実にシンプルで普遍的な提言であると思った。メンタライジングの創始者の1人のアレン（2012 上地訳 2017）は「素朴で古い療法」とメンタライジングをシンプルに例えているが、この概念は、目新しいものではなく本来心理臨床で目指されるべきことを的確に捉えていると感じた。

メンタライジング概念を理解した瞬間から、私は、生徒の話を聴いていて「共感しなきゃ」「受容しなければ」という強迫観念から解放された。「なんだ、生徒といっしょに悩みの背後にある心をいっしょに考えればいいんだ」と割り切ることができた。

そして、私は、今回の講師である西村馨先生たちのメンタライジング研究グループに接近していった。創始者のフォナギー、ベイトマンが来日して開かれた日本での第1回ベーシクトレーニングにも参加した。日本メンタライゼーション研究会の会員にもなった。

そうした中、よく議論されるのが、メンタライジングには2種類あるということである。MBT（メンタライジングに基づく治療）と、もう一つは「メンタライジング・アプローチ」である。前者は、対象ごとに理論的に精緻化され MBT-C（子ども用）、MBT-A（思春期用）などが開発されつつある。一方、後者は、メンタライジング（心を考える）ということを幅広くいろんな問題に適応していこうというアプローチである。例えば、他の心理療法にメンタライジングのエッセンスを加味する、集団や組織づくりをメンタライジング的発想で行う、授業にメンタライジングを活かす等である。

今回の西村先生の講演はどちらかというと MBT の理論に基づく精緻化された内容であった。そのような理論の1つに今回の実習した Thinking Together（協同思考法）がある。もともとメンタライジングを用いて、チームで若者を支援する時に、対象の若者ではなく、その若者に一番関わるキーワーカーをチームで支援するという発想に基づくものである。それを AMBIT（メンタライジングに基づく思春期・青年期統合的セラピー）という。その1つの手法として Thinking Together がある。

キーワーカーがクライアントとの問題でメンタライジング不全になっている時、他の支援者が Thinking Together を行い、そのキーワーカーをみんなでメンタライジングするのである。すると、そのキーワーカーは、クライアントとの関係性を再認識できたり新たな気づきを得たりして、メンタライジングが回復していく。

また、今回の提供された事例もチーム支援であった。チーム支援では一般的に支援者たちの様々な思いが交錯してしまうことが多い。そのような時は支援者たちのメンタライジング力が落ちているので、メンタライジング的発想で事例について考えることで、気づきを得たり再認識したりする。そのため、今回の事例検討も、発表者（＝キーパーソン）についての Thinking Together であったともいえる。

それまで全く知られていなかったメンタライジングがここ数年で一挙に広まったのには理由がある。現在様々な心理療法が登場しているが、メンタライジングという概念は、「心の事を考えよう」と原点回帰を促すものである。どのような心理療法においても、メンタライジング的な姿勢は重要であると思われる。そのことに、臨床家たちが気付いたため、メンタライジングという言葉が注目を集めるようになったのではないか。

一方で、メンタライジングは新しい概念であり、次々理論が開発されている発展途上のものでもある。そのためメンタライジングの研修会では、メンタライジングのどの理論をどの角度から説明するかがよいか、工夫が必要である。西村先生も、MBT の理論の中で絞り込んで今回の講義や演習をなさっていたように思われる。

馬場禮子先生は昨年2023年5月に病に倒れられ、回復をしつつも、残念ながら9月8日ご逝去されました。その訃報を知った際は驚きしかありませんでした。

それから「馬場禮子先生を偲ぶ会」実行委員会が立ち上がり100名を超える発起人のもと、2024年2月23日に明治記念館で偲ぶ会が開催されました。

信濃町の駅に着くと、馬場先生が長く通われていた慶応義塾大学病院が見えました。とても感慨深い気持ちになりつつ、会場に向かっていきました。現在明治記念館は結婚式場としても人気で、「偲ぶ会」が明治記念館ということに不思議な気落ちになりました。開会の挨拶では「馬場禮子先生が5月に病に倒れられ、コロナ禍で家族の面会は制限される中、7月にご家族が庭に咲いていたピンクのバラの写真を持っていった際『わー素敵だわね』と馬場禮子先生の声が私にも聴こえてきそうなエピソードを聞かせていただきました。そのため、「今日は娘さんと甥御さんがピンクのバラのブローチを着けていらっやっています」と紹介がありました。

この「馬場禮子先生を偲ぶ会」では、「ロールシャッハテスト法と精神分析的心理療法」のテーマでシンポジウムが開催されました。シンポジストは次の4名です。

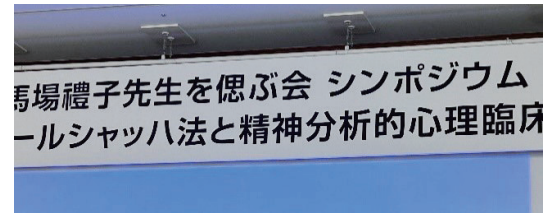
- ① ロールシャッハ法の精神分析的解釈－馬場法の臨床実践－ 黒田浩司氏（山梨英和大学）
  - ② 心理職にとっての精神分析的臨床実践－馬場禮子先生に学ぶ－ 吉村聡氏（上智大学）
  - ③ 子育て支援と心理臨床－馬場禮子先生が臨床心理士に託したこと－ 青木紀久代氏（白百合心理・社会福祉研究所）
  - ④ 馬場法とグループスーパービジョン 西河正行氏（大妻女子大学）
- また司会進行は、中村留貴子氏（千駄ヶ谷心理センター）・下川昭夫氏（東京都立大学）、世話人代表は、深津千賀子氏（大妻女子大学・千駄ヶ谷心理センター）といずれも錚々たる先生方でした。

シンポジストの発表のあと、平野直己氏（北海道教育大学）のもと指定討論がありました。シンポジストの方々の話を聞いていて私は不思議な気持ちになりました。私はこのシンポジウムに出させていただく中で、馬場先生は、「これほどまでに平等に接してくれる人はいないのでは」と感じ、それに感動しました。

指定討論者の平野先生からも山梨にある先生の別荘で、馬場先生とお酒を飲んだ時の思い出が披露され、より親しみを感じました。

私の馬場先生との思い出を記載させていただきます。山梨英和大学大学院で馬場禮子先生のゼミに所属させていただいていました。同期は3人で、毎週水曜日の夜2時間ほどゼミがありました。毎回3人がそれぞれ研究内容を持参し、それについて討論したり、馬場先生からその時々の課題について教えていただきました。私はゼミの中でいくつかのエピソードが今も新鮮に残っています。まず、私は現在も勤務している病院に勤務しながら大学院に通っていました。思うように自らの研究が進まないこともあり、ある時同じゼミの仲間から「齊藤さん苦しそうな顔をしているね」とゼミの前に言われ、案の上その時のゼミでは内容は覚えてはみませんか、かなり指摘を受け、これではダメだとあらためて強く感じた時がありました。でもそれがなかったら、前進がなかったのも言うまでもありません。ゼミが終わるといつものように、4人で食事に行きました。運転手は私です。私はその日職場から大学に向かう際、大学の近くのマクドナルドでセットを買い、車の中、そして大学の駐車場で食べたあと、授業に向かいました。私は自分の車に乗った際、マックのにおいが車中に充満していました。「あーどうしよう」と思いましたが、仕方ありません。「馬場先生どうぞ」と言うと『あー良い匂いだわね』とおっしゃり、「馬場先生もマック好きですか？」と聞くと『好きよ、おいしいわよね』との返答。さっきのゼミでの私の凍ったところがその一言で一瞬にして溶け、ほっとした気持ちになりました。そのようなエピソードがいくつかありましたが、シンポジウムに出ていると当時の体験がよみがえってきました。

最後に、馬場禮子先生は臨床心理士として、活躍し、後進の指導にあたりながら、多くのご著書を残されました。あらためて馬場禮子先生から学んだことは私の大きな財産です。これからは、恩返しの気持ちも含め、地域の心理専門職を必要としている方のためにも、できれば世界のためにも貢献できればと今思っています。馬場禮子先生これからも私達を見守っててください。ありがとうございました。



URL : <https://yamanashi-sccp.jp/>

e-mail : 山梨県臨床心理士会 事務局 [psychoyamanashi@yahoo.co.jp](mailto:psychoyamanashi@yahoo.co.jp)

山梨県臨床心理士会 広報 [psychoyamakoho@yahoo.co.jp](mailto:psychoyamakoho@yahoo.co.jp)